月とひまわり

kt

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月とひまわり

【Ｎコード】

Ｎ４１４９Ａ

【作者名】

ｋｔ

【あらすじ】

事故で父親の記憶を失った主人公がある事をきっかけにたったひとつの思い出を取り戻す物語です。

空は一面雲に覆われ、周囲は深い暗闇に包まれている。だがそれでいて雨が降るというわけでもなく、強い秋風が夜道に迷ったかのようにしきりに向きを変えて塵埃を四方に散らす。そんな風を呼ぶように庭や建物のどこかが時折音を立てるけれど、風はどこで鳴っているのかわからなくて困ったかのように僕の体に吹き付けてくる。雲は向こうの方へ流れているというのに。

そんな景色を眺めていると、ふと僕の頬に虫らしき小さい何かがとまった。一瞬、僕は鬱陶しさのあまりそれを手で払い除けようとしてみたが、そうすると虫が傷ついてしまうかもしれないという思いに捕らわれて、すぐに思い止まった。そしてもしかしたらこの虫も暗闇に目を眩まされてどこを飛んでいるのか分からないのかもしれない、などとぼんやりと思いながらそっと手でつかもうとすると、その虫は指の間をすり抜けるようにして音も立てずにすっと逃げ去っていった。ふと気付くと嘘のように風も収まっていて、一人ぽつんと取り残された僕はひどく裏切られたような、嫌な気持ちになった。自分は何もしていないのに、あらゆるものが自分の前から消え去っていく。光も風も、そして父親の存在も。

「おい」

そう呼びかけられて、僕ははっと振り向いた。見ると背後の奥座敷からいつの間にか兄が顔を出して僕を見下ろしている。僕は縁側に腰かけたまま「何？」と問いかけた。

「何じゃないよ、坊さんの読経が始まったぞ。焼香まで席を外すつもりか？つらいのはわかるがおばあちゃんなんてそんな事おくびにも出さずに…」

「違うよ」僕は割り込むように言った。「別に悲しくもないから出ないんだ」

「あ、そうか、忘れちまったんだよな。何もかも」
兄は悲しげにそう言うと、俯いて押し黙ってしまった。しかし僕はそんな兄の態度が心持ち同情的に感じられて、正直面白くなかった。

「昨日お前と孝佳は和美さんのお墓参りに車で出かけてね」
今日、僕に父の死と僕の記憶喪失のいきさつを話してくれたのは祖母だった。孝佳というのが祖母の息子であり、同時に僕の父でもある人らしい。和美という人は僕の母親で、僕が生まれて間もなくして亡くなった。写真で何度か顔を見た以外には、どんな人だったのか全くわからない。
「途中、レストランで食事を終えたおまえたちは駐車場から道路の反対車線に出るために右折したんだよ。そしたら大型トラックの後ろから突然車が猛スピードで突っ込んできて…」
後で詳しく聞いたところ、そこは片側二車線の高速道路と国道をつなぐ道だった。トラックは外側車線を走っていて僕らからは後ろの車が見えず、それがトラックを追い越そうと突然内側車線に出てきた。父はゆっくりとしたトラックとの距離を見て道路を横切ろうとしたので、その背後から１００キロ近いスピードで飛び出してくる車を避ける事は出来なかった。なぜそんなにスピードを出していたのかはわかるべくもない。高速道路のスピードに目が慣れきっていたのか、何か急ぐ用事があったのか、あるいは何らかの理由で気分が苛立っていたのか。いずれにせよ、両者はその場で衝突し、突っ込んできた車は吹っ飛び、僕の乗っていた車も弾き飛ばされて側面をつぶされた。ドライバーは双方共に即死だった。僕は奇跡的に無傷だったが、どこかを強く打ったのだろう、父親の事に関する記憶を全て失うという障害を負った。父親にまつわる過去だけ、を。
『そうか、僕はこれでみなしごになっちゃったんだな』
逆縁のショックに耐えながらも、祖母が目を真っ赤に染めて時折嗚咽を漏らしながら話している間、僕はぼんやりとそんな風に思っ

ていた。
『そもそも僕には初めから親なんていなかったんじゃないだろうか。兄との喧嘩もおばあちゃんの作る玉子焼きの味も覚えているのに、父のことだけ忘れるなんて事が本当にあるのだろうか』
この時にふと浮かんだそんな疑問は、今でも僕の中で消えずに残っている。

祖母の話の後で医師の簡単な検診があり、朝に受けた精密検査の結果が出る頃にもう一度来るようにと指示されると、僕は昼前に退院した。その時はまだ晴れていて、夏の名残を思わせる強烈な日差しが目に眩しかった。病院の前には一本のケヤキの並木道が伸びていて、その５０メートル程先にある外来駐車場に兄の車が止められていた。僕は兄と祖母の三人でそこへ向けて歩いていった。
するとその途中に一軒のレストランがあって、店先にディスプレイされたたくさんの食品サンプルの前に四人連れの家族が立っていた。その中で一番年下らしい、おそらく僕と同年代の子供がケースを前にはしゃいでいて、僕にはメニューがあまりにも多すぎてどれにするか決めかねているように見えた。秋とはいえまだ強い日差しにさらされて、長男らしい少年が苛立たしそうに何かを言っている。僕が近くまで寄ると、こんな会話が自然と耳に聞こえてきた。
「早く決めろよ」
「だってどれもおいしそうなんだもん。ねえお父さん、ボルシチってなあに？」
父親らしい人物がのんびりと口を開きかけると、兄がすかさず横槍を入れた。
「教えたら頼むのかよぉ」
「頼むかもしれないよ」
「お前はお子様ランチでも頼んでりゃいいんだよ」
「なんだよ」そう言って弟が兄の肩をとんとつつくと、兄も「なんだよ」と言い返してもっと強い力で弟の胸をどんと突き飛ばした。

「やめなさい！」途端に母親の一喝が飛んできた。それであっけなく二人の争いは投了となった。
僕はケヤキの木陰からそんな彼等のやり取りをぼうっと眺めていた。親は二人とも僕に背を向けていて顔を見ることが出来なかったので、それから僕は何気なく前に回り込んで覗き見ようとしてみた。
「どうした？」すると心配したのだろうか、兄がそう声をかけてきた。僕ははっと我に返って振り向き、なんでもないとだけ答えると仕方なくその場を後にした。家族の方も話がまとまったらしく、ちょうどその時に店の中へと入っていこうとしていた。僕は引きずられるように歩きながら、その後ろ姿を見えなくなるまで肩越しに眺め続けた。

「なんでだろう」
僕は縁側に腰かけて庭先を見つめながら、誰にともなく問いかけた。奥の仏間からは僧侶の読経が唸るように聞こえてくる。明日の葬式には隣の座敷に間仕切りを開放するのかもしれないが、今日の通夜にはあまりに突然の出来事で間に合わない親戚が多く、一室に収まっている。
「何が」兄が僕の問いかけに疑問で応えた。
「何でよりによって父さんのことだけを忘れちゃったんだろう」
「それは…」兄は返答に窮して黙ってしまった。
「もしかして、僕には初めから父親なんて人間はいなかったんじゃ」
「まさか」兄は強い口調で言った。「単なる偶然だよ」
そうだろうか、僕には信じられなかった。もしかしたらもともと印象に残りにくい、存在感の希薄な人だったのではないだろうか。だから初めからこれといった思い出も無く、ちょっとした衝撃であっけなく消え去ってしまうほど脆弱な記憶しか持ち得なかったのだ。
「それなら」僕はそんな疑問を迂遠に投げかけた。「兄さんは父さんについて何を知ってる？」

「何をって？」
「父さんって一体どんな人だったの？」
「そうだなぁ」兄は言いながら縁側に出てきて僕の隣に腰を降ろした。「わりと無口で、おとなしい感じの人だったかな」
逆に言えば影が薄いということだろうか、などと僕は意地悪く思った。
「他には？」
「人付き合いはあまり多くなくてね、酒も煙草もやらない。せいぜい園長会の打ち上げでたまに飲んだくれて帰ってくるくらいだった」
「園長？」
「うん、親父の職業だよ、保育園の園長。じきに廃園になるらしいけど」
「どうして」
「直接の理由は建物の老朽化。でもね、もともと少子化や過疎化の影響で園児が減り続けていたから」
そう言うと兄はふと空を見上げた。僕がその方向を追うように見ると、目映いまでに明るい光を放つ金色の満月がいつの間にか雲の切れ間からぽつんと顔を覗かせていた。どうやらゆっくりと晴天に向かっているらしい。
「それでも親父は」兄は続けて言った。「何とかして園を維持しようとしていろいろと奔走したらしい。町や県の役場を回ったり、息子を過去に預かった縁で交誼のあった町議会議員に掛け合ったりとね。とにかく親父としては、一人でも園が無ければ困るという人がいる限り、単に子供がいない、経営が成り立たないなんて理由で安易に潰す事なんて出来なかったんだ。地味でこれといった取り柄は無かったけど、そんな責任感は強い人だった」
「ふうん」僕はそんな風に相槌を打ちながら、しみじみと語る兄の姿に何か嫉妬のようなものを感じた。
「廃園の決定が公にされたとき、父母会からは当然のように反対意

見が相次いだらしい。その後子供はどうするのか、遠くの園に詰め込むのか、待機児が増えるのではないか云々。そして結局、そうした疑問に答え、説明し、不安を和らげるのは全て親父の役割だった。でもそうした責任からも親父は決して逃げようとはしなかった」

「いいなぁ」そこで僕はふと声を漏らした。

「え？」

「兄貴にはそんなにいろいろと思い出があってさ。僕にはそんな風に父親を誇り高く思えるものは何もないんだ」

僕がそう言うと兄は黙り込んでしまい、僕らの間に重い沈黙が流れた。家の奥では依然として腹に響くような読経が続いていたが、ある時ふとその止まる瞬間があった。おそらく焼香が始まったのだろう。

「さあ、行こう」

そんな機会を待っていたかのように兄はそう言って沈黙を破り、立ち上がった。すると僕もなんだかどうでもいいような、すべてがつまらない事のように思えておもむろに立ち上がろうとした。

『何も無いなら、何も無いで結構じゃないか。おかげでおばあちゃんみたいに深い悲嘆にくれる事も無いわけだ。葬式が終わればまたいつも通りの日常を送れるだろう』

まるで乾いた風が心の中をふっと吹き抜けるかのように、そんな思いが僕の頭をよぎった。

するとその時、僕は庭先にうなだれた円盤のような何かが、頼りなさそうな黒くて細い二本の線に支えられているのを見つけてふと目をとめた。なぜか惹きつけられるものがあったので、サンダルを履いておぼつかない足取りで近寄ると、それが一輪のひまわりであることがわかった。それは僕に背を向け、月明かりの中にぽつんと寂しげに佇んでいた。二本の線のうち、一本はひまわりの茎で、もう一つはその支柱だった。

そんなひまわりの姿をぼんやりと眺めていると、その時突然僕の脳裏にカッパ姿をした一人の中年の男の像が浮かんできた。男の周囲では激しい風雨が吹き荒れていて、庭木のいくつかが倒れたり枝が折れたりしている程だった。しかしそれでもその男は身動き一つせず、両手で茎を押さえたままじっとしていた。

『父さんだ』

僕ははっと思い出した。学校からもらってきた種をここに植えて育て、夏休みに大きな花が咲いた。そして僕はそれを自由研究のテーマにするつもりで毎日観察日誌をつけていた。

ところが8月の半ば頃になって、観測史上何番目という巨大な台風が本州に上陸した。僕は一応支えの棒を立てておいたが、心の中はもう駄目だろうな、というあきらめの気持ちに半ば支配されていた。こんな細長くて顔よりも大きな花をのっけた茎など、台風の強風にあおられてたちまち折れてしまうだろう、と思っていたのだ。

でもそうはならなかった。夜の１０時頃、風雨の勢いがいや増してきてひまわりの様子がさすがに気になり、二階の窓からふと庭を覗いてみると、僕はそこに茎にしがみつくようにして立っている父親の姿があるのに気付いた。僕は一瞬、何をしているのかよくわからずにいたが、自分のひまわりを守ってくれているのだと気が付くと窓をあけて激しく吹き込んでくる風雨に耐えながら分かりきったことを叫んだ。

「何をしてるの！？」

聞こえなかったのだろうか、父親はやはり黙ってじっとしている。僕はその後も何度か「もういいよ」と声をあげて叫んだが、やはりその背中は振り返らなかった。それから数時間か経って風がある程度収まるまで、父親はずっとそうしていた。

そしてそのひまわりが今目の前に、種をびっしりと詰まらせていかにも重たそうに頭を垂れている。

「おい、早くしろよ」
兄が家の中からそう言って呼んでいる。僕はその声が聞こえない振りをしてひまわりの前に立つと、そっと背伸びして腕を伸ばし、その種をひとつだけ掴み取った。
『これでいいや』僕は地に足をつけてその種を掌にぎゅっと握り締めながら思った。『いろいろありすぎてどれが一番いいのか分からなくなっても困るから』

すると僕はひまわりのもとを離れ、家に向けて足を踏み出した。僕の背中では、ひまわりがうなだれながらもしっかりと地に根を下ろし空に向かってまっすぐ伸びていて、その上からはそんなひまわりを慰めるように、やわらかな月の光が明るく地上に降り注いでいた。そして僕は明るく照らされた地面の上を歩きながら、手の中の種を大切にポケットの中にしまい込んだ。家の中では兄がさすがにじれったそうに僕を待っていて、僕は兄のもとに辿り着くなりこう言って縁側に上がった。

「父さんに会ってきたよ」、と。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4149a/

月とひまわり

2010年10月8日15時15分発行